萬葉集略解

十上

和書門 類
四三三〇號
一三七函
九架
三二冊

内閣文庫
和書 類
四三三一〇號
二冊
二六三函一四架

内閣文庫
番號 和 43310
冊數 32 (14)
函號 263 41

Kodak Gray Scale
colorchecker
x·rite
国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集巻第十

春雜歌

雜歌七首○詠鳥二十四首（詠鳥哥十三首ありて打靡春去来者の哥より下十一首ハ雪の上の也、されハ詠雪の標を落せるすて、こてよ廿四首とせるハ誤也）○詠霞三首○詠柳八首○詠花二十首○詠月三首○詠雨一首○詠川一首○詠煙一首○野遊四首○歎舊二首○懽逢一首○旋頭歌二首○譬喩歌一首

春相聞

相聞七首○寄鳥二首○寄花九首○寄霜一首○寄霞六首○寄雨四首○寄草三首○寄松一首○寄雲一首○贈蘰一首○悲別一首○問答十一首

夏雜歌

圖書局文庫
弘前醫官澁江氏藏書記
日本政府圖書
淺草文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

詠鳥二十七首○詠蟬一首○詠榛一首○詠花十首○
問答二首○譬喩一首

夏相聞

寄鳥三首○寄蟬一首○寄草四首○寄花七首○寄露
一首○寄日一首（今本日を目ニ誤れり）

秋雜歌

七夕九十八首○詠花三十四首○詠鴈十三首（詠鴈三をとりて次ニ遊羣十そと標せり八此遊羣二字ハ鴈の歌の中の末句の詞なるを、誤く本文ニ此二字を別ニ書出せしよりし目録ニてかゝるあやまちを改つ）○詠鹿鳴十
六首○詠蟬一首○詠蟋蟀三首○詠蝦五首○詠鳥二
首○詠露九首○詠山一首○詠黄葉四十一首○詠水
田三首○詠河一首○詠月七首○詠風三首○詠芳一
首○詠雨四首○詠霜一首

秋相聞

相聞五首○寄水田八首○寄露八首○寄風二首○寄
雨二首○寄蟋蟀一首○寄蝦一首○寄鴈一首○寄鹿
二首○寄鶴一首○寄草一首○寄花二十三首○寄山
一首○寄黄葉三首○寄月三首○寄夜三首○寄衣一
首○問答四首○譬喩歌一首○旋頭歌二首

冬雜歌

雜歌四首○詠雪九首○詠花五首○詠露一首○詠黄
葉一首○詠月一首（今詠の字を脱せり）

冬相聞

相聞二首○寄露一首○寄霜一首○寄雪十二首○寄
花一首○寄夜一首

春雜歌

久方之天芳山此夕霞霏霺春立下

ひさかたのあめのかぐやまこのゆふべかすみたなびくはるたつらしも

こころめらけし

巻向之檜原丹立流春霞欝之思者名積米八方

まきむくのひばらにたてるはるがすみおほにしおもはばなづみこめやも

是ハ旁歳ニ同之、意ハおほしきといふ序なくさて下の句ハおもき、

みるもの深きまらんやといふ

古人之殖兼杉枝霞霏霺春者来良之

いにしへのひとのうゑけんすぎがえにかすみたなびくはるハきぬらし

これをよのつきぬまで青山の杉あるべし、古への人のうゑんとハ口へ手経

さるといふのこ

子等我手乎巻向山丹春去者木葉凌而霞霏霺
こらがてをまきむくやまにはるされば このはしぬぎて かすみたなびく
こらがてを枕詞、あなしぬぎては茂木の葉のあはひまでをのぞこえ
玉蜻夕去来者佐豆人之弓月我高荷霞霏霺
かぎろひのゆふさりくれば さつひとのゆづきがたけに かすみたなびく
かぎろひの、さつひとの枕詞、巻七巻むくの虫挽のくだりとよみあれば大和城上郡之
今朝去而明日者来牟等云子鹿丹旦妻山丹霞霏霺
けさゆきて あすはきなんと いひしこの あさづまやまに かすみたなびく
朝づまといふ山の名によりて、朝日まさくは又あすもまたきなんといひし妻の契りをおもひて、
めぐみ朝妻山の霞のたなびくをいひつゞけて、上の句の趣を序とせしなるべし、考べし、
天武紀九年九月癸酉朔辛巳幸于朝嬬、云々、仁徳紀の注云、阿佐豆麻能避箇能烏瑳箇烏（アサヅマノヒカノヲサカヲ）、云々、又姓氏録太秦宿祢の先祖を、大和朝津間腋上地に居

しむるなるべし、大和葛上郡之、近江にも名あれどおなし
子等名丹関之宜朝妻之片山木之尓霞多奈引
こらがなに かけのよろしき あさづまの かたやまぎしに かすみたなびく
関を開に誤れり、元暦本によりて改む、この歌の関はまさる歟
かよきといひて、まさしく朝妻の宜しくことば、まことにたくひれの趣もしりさき
妹がうるはしせのみおもひはかりあるん、さらに前にもて妻といひし辞のこ
右柿本朝臣人麻呂歌集出
詠鳥
打霏春立奴良志吾門之柳乃宇禮尓鶯鳴都
うちなびく はるたちぬらし わがかどの やなぎのうれに うぐひすなきつ
うちなびく枕詞、霞とうちなびくとよめれど、かゝる麻とよめれば麻の事
みなやまるるこの

喙ヲ啄ニ誤

梅花開有崗邊爾家居者乏毛不有鶯之音

うめのはなさけるをかべにいへをればともしくもあらずうぐひすのこゑ

六帖にハいへしあれバとあるを、いへをれバとし、いへをれバ寂るちかの例也とも

しきハ乏しくなきをいふ

春霞流共爾青柳之枝喙持而鶯鳴毛

はるがすみながるゝなべにあをやぎのえだくひもちてうぐひすなくも

春霞のたなびくが水の流るゝやうに見ゆるをながるゝといふ、共ハなべにとよむなり

よみたれど、こゝハなべてとよむべきか、鳴ものもかものを、拾遺に六帖の

ほこらひまちてとしよめる

五瀬子守莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深刀爾

わがせこをなこせのやまのよぶことりきみよびかへせよのふけぬとに

大和の巨勢山をなこせといひかけたり、いひかけたるハ、せこのこゝろを巨勢山とかけたるといふハ、素直にて、

わが方より絶る丈となる山とこそしめすてれ、それハ返せとよみなり、夜ハ借字、

よぶこ鳥を照らし、刀尓ハ繼體紀にうろ于魔伊祢矢度俤といへる同じく、刀尓ハ

時尓の意なり

朝井代爾来鳴杲鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴

あさゐでにきなくかほどりなれだにもきみにこふれやときをへずなく

ゐでハ堰なるをいふ、されどこゝハ塩といふべし、さて井の

もいふべし、此下にも朝戸出之とよめれバ、こゝハ井ハ戸の誤なるべし、あさとで

にあるべし、杲音高きかほのこゑかほどりかほるといへる

ハ鳴やまずして頻に鳴をいふ、さるを恋ふるかめく、汝もと恋ふれバなや

といふなり

冬隱春去来之足比木乃山二文野二文鶯鳴裳

ふゆごもりはるさりくればあしびきのやまにもぬにもうぐひすなくも

在ハ去ノ誤

紫之根延横野之春野庭君乎懸管鸎名雲
むらさきのねはふよこのゝはるのにはきみをかけつゝうぐひすなくも
仁徳紀十年冬十月築横野堤、神名帳河内国澁川郡横野神社あれバこの内なり、二の句ハ其野のさまをいへるのミ、かけつゝハおもひかけて君をしのぶるにて
いつも鳴ものゆゑかくいふものぞ

春之在者妻乎求等鸎之木末乎傳鳴乍本名
はるされバつまをもとむとうぐひすのこぬれをつたひなきつゝもとな
在ハ去とある、元暦本に去とあり、吹下に二首春之在者とあり、志あと有れバさ
ともなるをえてかくいへるも、木末こずゑともよむべけれど、歌にかなはねバこぬ
れとあれバこそよめるなれ、こゝろよむ、鶯のつまかりむとしてなくなるをもいふなり
いつもなきなく

春日有羽買之山従猿帆之内敝鳴往成者孰喚子鳥

居ハ下之者ノ誤

米ハ来ノ誤

かすがなるはがひのやまゆさほのうちへなきゆくなるハたれよぶこどり
其二羽易の山とよめり、さほと猿帆とかけるハ和名抄下総猨島作之との例之
万

不容雨勿喚動曽喚子鳥佐保乃山邊乎上下二
こゝろへぬよなよびとよめそよぶこどりさほのやまべをのぼりくだりに
其時をこれハよの歌の犯去 かくつしてよめり、二首ともかくよめる 歌の序
みるべしとらへり

梓弓春山近家居之續而聞良牟鸎之音
あづさゆみはるやまちかくいへをれバつぎてきくらんうぐひすのこゑ
居之の之ハ者の字を誤れるなりと宣長いへり

打靡春去来者小竹之米丹尾羽打觸而鸎鳴毛
うちなびくはるさりくればさゝのうれにをはうちふれてうぐひすなくも
うちなびく枕詞、其本小竹之米とあるを、小竹ハ篠のこと、元暦本米を末ニ

俗にいふ、そのかれに何り、巻十二小竹之上尓きゐてなくとりとよみたれバ末
とかりみゆるべし、翮ハ借字にて振ひ、ちゝくものもハかすのこと

朝霧爾之怒怒爾所沾而喚子鳥三船山従喧渡所見
あさぎりにしのゝにぬれてよぶこどりみふねのやまゆなきわたるみゆ
之怒は詩に多く努と兆、しのゝハ次下に小竹野尓所沾而とかくり、さゝとも
用いゝて借ちがいくちでしのゝとく小雨にかゝるとしのゝに濡れ、みふねの山ハ
吉野なり、以下ちハ、以下三首のあ、次の歌より春雪とよめれハにて
不詠雪とあらんと落ちしなるべし

打靡春去来者然為蟹天雲霧相雪者零管
うちなびくはるさりくればしかすがにあまぐもきらひゆきハふりつゝ
てきらひハ今の霞むといひ、雪ふるがし、しかすがふかしともいへる、
しかすがのハ、しかすがに、さりながらといへども同

梅花零覆雪乎裹持君爾令見跡取者消管
うめのはなふりおほふゆきをつゝみもてきみにみせんととればきえつゝ

梅花咲落過奴然為蟹白雪庭爾零重管
うめのはなさきちりすぎぬしかすがにしらゆきにはにふりしきりつゝ
梅ハさきちりぬとおもふと、しかしながら庭にハゆきハふりしきるといへる

今更雪零目八方蜻火之燎留春部常成西物乎
いまさらにゆきふらめやもかぎろひのもゆるはるべとなりにしものを
まちたる春の節を久しくよめるにいのぎろひハ巻一に既出

風交雪者零乍然為蟹霞田菜引春去爾来
かぜまじりゆきハふりつゝしかすがにかすみたなびきはるさりにけり
巻五まで風まじり雨の降夜の雨まじり雪のふる夜よハとよめり

山際爾鸎喧而打靡春跡雖念雪落布沼

やまのまふゆくひさてあきらてうちなびくちるとおもへどゆきふりしきぬ

峯上爾零置雪師風之共此間散良思春者雖有

をのうへにふりおけるゆきしかぜのむたこゝにちるらしはるにはあれども

雪しのしハ助辞、むたハともにと同じ

右一首筑波山作

為君山田之澤惠具採跡雪消之水爾裳裾所沾

きみがためやまだのさはにゑぐつむとゆきげのみづにものすそぬれぬ

ゑぐハ巻十一にも山沢田ゑぐともよみて、東国にてハゑぐといひ、ある人

ハゑぐとよめり、其ハ藺に似てほそく根ハ白くふき芋のごとくなるもあり

しかれどもくハしくハしらず、なほかんがふべし

梅枝爾鳴而移徙鶯之翼白妙爾沫雪曽落

うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる

うつろふハ木傳ふにくりかへしなり

山高三零来雪乎梅花落鴨来跡念鶴鴨

やまたかみふりくるゆきをうめのはなちりかもくるとおもひつるかも

一云梅花開香裳落跡

ちりかものかもハ疑辞、かものもハ哉也

除雪而梅莫戀足曳之山片就而家居為流君

ゆきをおきてうめをなこひそあしびきのやまかたつきていへゐせるきみ

右梅の花ちりくるかと思へるハ梅と雪とまがへるなり、雪をさして梅とおもへる

とて、雪をさしおきて梅をこふることなかれと也、又山かたつく

つきてハ山によりてといふ、末ハ山片つきて家居せるきみ

とよめるなり

右二首問答

詠霞

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾来

きのふこそとしハくれしかはるがすみかすがのやまにはやたちにけり

年九吾船将極ハテンとまりらむともされバこゝにもきこえよめり

寒過暖来良思朝烏指滓鹿能山爾霞軽引

ふゆすぎてはるきたるらしあさひさすかすがのやまにかすみたなびく

寒暖胡鳥ハ義をもてよめり、朝日さされたるたゞ山の景色をいふのみ

鸎之春成良思春日山霞棚引夜目見侶

うぐひすのはるになるらしかすがやまかすみたなびくよめにみれども

春ハまさに来たるにやとのべたり、その来たるをつけたる句の自みえく句を切て

さて夜見れどもといふ、第一句末句なる志ろバ春きたるらしと訓べし、

いづれにてもよかるべし

詠柳

霜干冬柳者見人之鬘可為目生来鴨

しもがれしふゆのやなぎハみるひとのかつらにすべくもえにけるかも

冬柳干を十ヨほされて見ハ良の手の使ふて、よきひとのかずらにすべしと云の

いふなれき

浅緑染懸有跡見左右二春楊者目生来鴨

あさみどりそめかけたりとみるまでにはるのやなぎハもえにけるかも

染く絶也

山際爾雪者零管然為我二此河楊波毛延爾家留可聞

やまのまにゆきハふりつゝしかすがにこのかはやぎハもえにけるかも

山際之雪不消有乎水飯合川之副者目生来鴨

青やぎとしいへバはやぎといふべし

やまのまのゆきハけざるをみなぎらふかはのそひにハもえにけるかも

たのおとはあるべし水飯合よ書べしとして飯ハ激の字の誤なるべし

こなぎらよハ激よみなぎる川のそひハ柳よみなぎらへ柳といへるなり

よるうらよあるハ後のひらよ説いへども一首の上ハ更よそのも其こ数

の柑なよ久るうもとよめるおくは何集ニ見えたり

朝旦吾見柳鶯之来居而應鳴森爾早奈禮

あさなさなわがみるやなぎうぐひすのきゐてなくべくもりにはやなれ

森字ある本多愁とあり字読森木長貞伊与こ加尓

青柳之絲乃細紗春風爾不亂伊間爾令視子裳欲得

あをやぎのいとのくはしさはるかぜにみだれぬいまにみせむこもがも

絲乃細紗四字ハ緑乃細絲とありしを後に誤れるなるべし伊間の伊ハ助辞なり

[illegible]れき指すべし伊間の伊ハ助辞なり不乱間よく

百礒城大宮人之縵有垂柳者雖見不飽鴨

ももしきのおほみやびとのかづらけるしだりやなぎはみれどあかぬかも

かづらけるハかづらとせしをいふなり

梅花取持見者吾屋前之柳乃眉師所念可聞

うめのはなとりもちみればわがやどのやなぎのまゆしおもほゆるかも

眉を眉と[illegible]梅をとりもちて見るよりも宿の柳をおもひ出るなり

詠花

鶯之木傳梅乃移者櫻花之時片設奴

うぐひすのこづたふうめのうつろへばさくらのはなのときかたまけぬ

うつろふハ散をいふ枝より枝へうつるをもいへり

片まけハ時よ

櫻花時者雖不過見人之戀盛常今之將落

はくぶなまよきハちぎりまでみるひとのこひのさのわざいまぞちるらん

咲きたるを八おしまねど人のめづるさかりなるをちるらんとなげく

わかぐころおもひ人ハまされるあめをまつる後のこゝろかなしみおもく

ひとこのおもふれバ人ぞまさきあらぬへきなん、かくて世に在てのちられバそ

よろしかるらん

我刺柳絲乎吹亂風爾加妹之梅乃散覧

わがさせるやなぎのいとをふきみだるかぜにかいものうめのちるらん

家牛刺柳とよみて柳ハ枝を地に刺てよく生るものなれバかく

いつかハ妹がやどの梅を見ることに

毎年梅者開友空蟬之世人君羊蹄春無有来

としのはにうめはさけどもうつせみのよのひときみしはるなかりけり

第十九番注に毎年謂之等之乃波とあり　君ハ五音の字の謂まてよのひと

わかしきるべしハ梅ハまちでかれさけざし、現身の人なる吾ハ梅の花を

めぐりて得ぬと数くらし、羊蹄をこのかるよ用ゆる事ハ既に

打細爾鳥者雖不喫繩延守巻欲寸梅花鴨

うつたへにとりはまねどなはへてもらまくほしきうめのはなかも

うつたへハひたすらのこゝろ、また仰神村をよむことかたるべしく人まて

とハふれぬものこゝろよめり

馬並而高山部乎白妙丹令艶色有者梅花鴨

うまなめてたかきやまべをしろたへににほはしたるはうめのはなかも

細句るまてとてハ一そとのひがゝしハ打ちべてとなりて八この花ひ新き

うらハ雲ちしも馬ハ怨の得ちらんとのつや八梅ハ櫻の字れ得たるべし梅を

花咲而實者不成登裳長氣所念鴨山振之花

なくさき国の木ならねバたる山よもおのづからなるのなきく

ちかのさきてみはなくねどしかのきけるおもほゆるかも。やまぶきのさま

山吹の字をあてゝぬるは誤なり。上なるも山吹とかけり。之振ハ布利の利を伎と写し

て伝ふ。和名抄に款冬をやまぶきとせるハおしはかりなり。款冬ハ

なれバ、ちきさも八日久しくと枕に此子女のうけひきぬ、いまだ寝ぬを

さへさる譬喩歌なるが、まぎれてのせたるなるべし

能登河之水底并爾光及爾三笠之山者咲来鴨

のとがはのみなそこさへにてるまでにみかさのやまはさきにけるかも

能登河ハ添上郡にて、高円と三笠の二の山の間を西へ流れたり。花ハ

桜なるべし。花とのみいひて咲をいふも集中に例多し

見雪者未冬有然為蟹春霞立梅者散乍

ゆきみればいまだふゆなりしかすがにはるがすみたちうめはちりつつ

去年咲之久木今開徒土哉将堕見人名四二

こぞさきしひさきいまさくいたづらにつちにやおちむみるひとなしに

久ハ冬の字の誤にて、ふゆきなるべし。集中冬木の梅とも又ここハ冬

木の上に降雪とよみしのバ、即冬籠せし木のまゝにて、春に咲を

いひ、又花も梅のまゝ梅にて去年の冬咲しが、冬木となすり

さるを今み春に咲くもいふそとも見るべし。まへ之久木と字を久米

の誤なりとこぞさけるさくらいまさくこのいづれも久木まへもやゆきさくと

みのそれなり

足日木之山間照櫻花是春雨爾散去鴨

あしびきのやまのまてらすさくらばなこのはるさめにちりゆかむかも

散の上将の字脱しこの

打靡春避来之山際最木末之咲往見者

うちなびくはるさりくればやまのまのもとほきこぬれのさきゆくみれば

巻八にうちなびく春来良之山際遠木末のさきゆくみれど今同じさま
によめり、これも散をとちらすと訓べし

春鴙鳴高圓邊丹櫻花散流歴見人毛我裳

きゞしなくたかまとのべにさくらばなちりてながらふるみむひともがも

ながらふるハながるゝを延ていへる事にて別義なし

阿保山之佐宿木花者今日毛鴨散亂見人無二

あほやまのさねきのはなはけふもかもちりみだるらんみるひとなしに

阿保山ハ山城の山優の名なりし、伊賀国にもあり、阿保氏の地なるべし、

作宿木ハ巻十三作楽花ともしるせるを思へバ、こゝも作楽の二字なるを、

作宿木三字に誤りしなり、さくらのはなとみるべし

川津鳴吉野河之瀧上乃馬醉之花曾置末勿勤

かハづなくよしのゝかはのたぎのへのあしびのはなぞおくにまなれきさ

馬醉木咲ぬいづれの結句いかにとも解がたく訓もさだかならず、古き宗帖にあやまり
の花ぞおくにまされるをしらんとおもへバ、置ハ觸の字の誤、末ハ手の字
の誤にて、たきつせに手をゆりと訓んかあしびの花を見てまゐる顧りてこちあ
るべき歟いそれき、宣長云、花曾の曾の字ハ乎の誤なるべし、
又勿ハ莫に通じていひしにて、ゆめといへる例なり、ゆめと云時ハ必らず勿と同じ類の字有
ハ故めて入れたるなるべし、又或人ハ末ハ土の誤にて、つちにおくなゆめと訓べし
といへるよしいづれか考ふべし

春雨相争不勝而吾屋前之櫻花者開始爾家里

はるさめにあらそひかねてわがやどのさくらのはなハさきそめにけり

花をさき揃し、まゐるの時は雨に勝ずして咲たると、相争とあるハ巻一相格
さくはなをつゞけよめる例也

春雨者甚勿零櫻花未見爾散巻惜裳

はるさめハいたくなふりそさくらばないまだみなくにちらまくもをし
春去者散巻惜櫻花片時者不咲含而毛欲得
はるされバちらまくをしきさくらばなしばしハさかずふゝみてもがも
やまハつゞみくゝ、おもしむかするかくハそか、櫻一本 梅ふれる
見渡者春日之野邊爾霞立開艶者櫻花鴨
みわたせバかすがののべにかすみたちさきにほへるハさくらばなかも
何時鴨此夜之将明鶯之木傳落梅花将見
いつしかもこのよのあけんうぐひすのこづたひちらすうめのはなみん
そのちるも梅花をみんとく、鶯の啼るを結そ之

詠月

春霞田菜引今日之暮三伏一向夜不穢照良武高松之野爾
はるがすみたなびくけふのゆふづくよきよくてるらんたかまとののに

三伏一向とあるハいとむつかし、前ハ三表伏いをく、一てびむつかしきとうらく
かくれバ四日の夜の月といふべし、さる義とまて暮三伏一向夜をゆふづくよ
と訓るうへいそれつれど法をきまるべし、打よく考へてん、巻十三根せうろく
よする一伏三向とあるこハこもすいふべし、教と空と恵ハ松をすわくの
うちに係ささ
春去者紀之許能暮之夕月夜欝束無裳山陰爾指天
はるされバきのこのくれのゆふづくよおぼつかなしもやまかげにして
一云春去者木陰多暮月夜
このくれハ木之暗なく、木蔭のくらきをいふ、良根まこぐれおほき、六帖に六
ちぐれおほきそのせつか、木のこのくれハさきちわれバ一本のこぐれ
おほきのこゝとみるべし、おぼつかなしものもハ助辞
朝霞春日之晩者従木間移歴月乎何時可将待

あさがすみかすみびのくれハこのまゆふつくよつきをといつこのまゝん

宮君云一二の句ハ春日の霞ふくくらきを云くれの詞ハこのくれるゝ

いふ句じさく春霞のくらさ時ならしいふ也し霞のくらき時ならより

後までのまちくしきよしといふ也くれの詞を日の暮とみるまちて八一首雅

ならしくれハの八を濁るハわろし

詠雨

春之雨爾有来物乎立隠妹之家道爾此日晩都

はるのあめにありけるものをたちかくれいもがいへぢにこのひくらしつ

春の雨ハ降ふとくやまぬものなるをかりそめの雨のやうに思ひて道にて

雨やどりをして妹が家にもゆかずつひにたまく日のくれぬると

詠河

今往而聞物爾毛我明日香川春雨零而瀧津湍音乎

いまゆきてきくものにもがあすかがハはるさめふりてたぎつせのとを

聞の字ハ今もきくの字ハ末句ハたぎる瀬のおとといふ也

詠煙

春日野爾煙立所見𡢳嬬等四春野之菟芽子採而煮良思文

かすがのにけふりたつみゆをとめらしはるのゝうはぎつみてにらしも

和名抄莪蒿於八木　従よめがはぎといふなり　巻二にも出　うはぎハ

嫁菜とも云

野遊

春日野之淺茅之上爾念共遊今日忘目八方

かすがのゝあさぢのうへにおもふどちあそべるけふハわすらえめやも

巻七にもまてわれハこのんなる春日の浅茅のうへにてあそびし日を

春霞立春日野乎往還吾者相見彌年之黄土

はるがすみたつかすがのをゆきかへりわれはあひみんいやとしのはに

あるんハ友まあるんの、黄土ハ借字、としのはに[illegible]

いへり

春野爾意将述跡念共来之今日者不晩毛荒粳

はるのぬにこゝろやらんとおもふどちきたるけふはくれずもあらぬか

[illegible]こゝろやらんとハ述ハ心を遣とよむ[illegible]

集中にハ、[illegible]をのぶとよみ、[illegible]をのべ[illegible]

[illegible]あるハあるじ、あるハあれ[illegible]の語なり

百礒城之大宮人者暇有也梅乎揷頭而此間集有

もゝしきのおほみやびとはいとまあれやうめをかざしてこゝにつどへる

もゝしきの枕詞、あれやハあれバや也、あれやとりつどへる[illegible]

歎舊

寒過暖来者年月者雖新有人者舊去

ふゆすぎてはるしきぬればとしつきはあらたなれどもひとはふりゆく

四五あらたまれども、契沖ハのべるごとく、有の字あまりぬ

なれどもとよむべし

物皆者新吉唯人者舊之應宜

もののみなはあらたしきよしたゞひとはふりぬるのみよろしかるべし

ものゝみなはあらたしきよしとハ、尚書盤庚上曰、遅任有言人

惟求舊、器非求舊惟新、といへるより[illegible]

懽逢

住吉之里得之鹿齒春花乃益希見君相有香聞

すみのえのさとゆきしかばはるはなのいやめづらしききみにあへるかも

得ハ行ノ誤

桃と渇ハ紀の字の写ちがへ侍れる之、赤見とめづらしとよむうへよろ紀と
りくらへり

旋頭歌

春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見

かすがなるみかさのやまにつきもいでぬかもさきやまにさけるさくらのはなのみゆべく

此歌ハ例の此ようし称す句之作紀山ハ添下郡

白雪之常敷冬者過去家良霜春霞田菜引野邊之鶯鳴烏

しらゆきのとこしくふゆはすぎにけらしもはるがすみたなびくのべのうぐひすなきぬ

うぐひすのなくハ烏ハ鳥一本焉とあり

譬喩歌

吾屋前之毛桃之下爾月夜指下心吉菟楯項者

わがやどのけもものしたにつくよさししたごころよしうたてこのころ

桃の実に毛の生ずるをけももといふ。又毛桃といへるハ花にてありけんをいへり。

桃のもとにて月の影のさしたる [illegible]

よきをいふ。下心吉ハ隠し置て [illegible] 下心吉ハ心の

上の句ハ下心といふべき序なり。下心苦ハ [illegible]

[illegible] 桜に此段もいふべし、こころぐしと

訓べくおぼゆ。うたてハ [illegible] 古き紀にもそのみえたり

と猶其悪事不止而轉、安康條、侍其大長谷王之御所人等白字多氏物

云王子と [illegible] 考のにも紀にみゆ

春相聞

春日野。犬鷲鳴別。眷益間。思御吾

かすがのにともうぐひすのなきわかれかへりますまもおもほせわれを

犬ハ友の字の誤なるべし。此歌のこゝろハ旅をかくしたれバ犬の下苗の字を脱せるか

ハあるじ、鶯の友をもてゆく時のぬく、泣ておくりて、その又かへり来ますまでも、

わすれずしておもひおこせよといふ心。春ハかへるといふ事なれど、考ニ

あをのつかひ子春奴といへるハ、そのこゝろをよむべくれバ、付くべきなるべし、

宣長云、犬ハ友の誤なり。かすがのゝうぐひすのなくといふ

冬隱。春開花。手折以。千遍限。戀渡鴨

ふゆごもりはるさくはなをたをりもちちたびのかぎりこひわたるかも

花のいろうつくしきをめでゝいふ、まつを然いふ、冬ごもりハ枕詞

春山。霧惑在。鶯我益。物念哉

はるやまのきりにまどへるうぐひすもわれにまさりてものおもはめや

いはんへ霧も春にいつかハ鶯の声よかりハ、おもひて思ひ迷へとよみて郎

緣咽霧山鶯鳴折サ

出見。向崗本繁。開在花。不成不止

いでゝみるむかひのをかにもとしげくさきたるはなのならずばやまじ

むかひの岡に花の多くさけるをいひて、むかつをといへるがごとし。かくハ別本に、茂樹の花咲て

かならずなるべきをいふ、さて花ハ桃の字の誤ならん、

巻七にもはしきやし吾家(ワギヘ)の毛桃本繁花のみさきてならざらめやも、巻十一にもやま

との室原(ムロフ)の毛桃本繁ソいひてしものをならずハやまじといへるに大方同じ

と宣長いへり。宣長云在ハ毛の誤にて、さきたるけなるべしといへり

霞發。春永日。戀暮。夜深去。妹相鴨

かすみたつはるのながびをこひくらしよのふけゆきていもにあへるかも

春去。先三枝。幸命在。後相。莫戀吾妹

はるされバまづさきくさのさきくあらバのちもあはんなこひそわぎも

まつさくべくのまゝ花さくあるれバ、はるされバさきさくといひくだして、さて

さきくさとさきくしいへん序なるべし、さきくさハ或ニ福草、和名抄ニ

葛佐木久佐 とあり、ニ説釋考まくりし、命あらバ後にも逢んといはん為なり

云先ハ花の條へ花までハさきの序ぞといへり

春去為垂柳十緒妹心乗在鴨

はるされバしだりやなぎのとをゝにもいものこゝろにのりにけるかも

はるされバ二のうへのしだれるを、和名抄云兼名苑云柳一名小楊 之太里夜奈木云

云しあるべとをゝハたわゝに同じくしなひたることなり、末ハ春ニ来人の為

前のまへのことも妹情ニ乗ニ家留香問、末ニ乎一に又同じ、此歌ハ妹ガ

ことのあるまゝかんのよくよきてといへり

右柿本朝臣人麻呂歌集出 かきのもとのあそんひとまろが家集のうちなり

そらくハ右の下七首の字脱たるこの

寄鳥

春之在者伯勞鳥之草具吉雖不所見吾者見将遣君之當婆

はるされバもずのくさぐきみえずともわれハみやらんきみがあたりハ

はるされバよりよりがくあるに、和名抄兼名苑云鵙一名鶪、楊氏漢語抄云伯労毛受ト云ク

とあるくさぐきハ疑照従ニそれでありといへり、古事記集ニ御刀之手上血自手股漏出（クキデ）訓漏云久伎ト云ク

しありて同じく、くさハ股下のことを漏れじハちへハまべて

はなくしとなへしとあり、さらくハまつのやまにさとくのすゑとくぐりて見えぬ

のあく、もののめハこしよもて見えねども、あるハんあてまえやりてあらんとえ

容鳥之間無数鳴春野之草根之繁戀毛為鴨

かほどりのまなくしばなくはるのゝのくさねのしげきこひもするかも

巻三ちかづかひのまれくしなるらくもみなかちきてへいはひそしらずの
かくろひのこふくよあり、迷きてよしもむ、口のるの夢移くりっまでハしげき
といへる序也

寄花

春去者宇乃花具多思吾越之妹我垣間者荒来鴨

はるされバうのはなぐたしわがこえしいもがかきまハあれにけるかも

巻十九宇乃花乎令腐(クタス)霖雨(ナガメ)のしもよめり、うのはなをさえぎるハいふにあらず
めれバ宮ちに往まで四月ごろまでハ大やうにきよらかにてさかゆる、さかされバき
のこのくれあがりて四五月ごろといへり、三月まで八さかりて本ハさげるなど、おこ
さかるハ四五月ごろといへるぞよき、或説に宇の下の字を移しるといへれど、
垣なるといへるも梅ハ如つつしつねバ折ともなるハむづかしくて、くもし八巻十
九にあるがごとく腐しむるをまくもそへてハいでてくれハしもしるらすまいるべし

卯ハ卯花垣を思越るとて、ことをなしちらせしがくれしく過ぐしてハ、て
花の垣なるさまをよめる也

梅花咲散苑爾吾将去君之使乎片待香花光

うめのはなさきちるそのにわれゆかんきみがつかひをかたまちがてら

巻十八田邉史福麻呂か宴にて裁ふかく香の下苑ハ衍文なるべし、巻一山
上の清井を見我氐利(ガテリ)とあて、片待ハかたまちがてりハ梅花をさい
て君が使をしも待んとおかねていふ詞也

藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者久雲在

ふぢなみのさけるはるのにはふくずのしたよのこひハひさしくもあらん

初句ハ未布をいへる為のこと夜ハ借字なるくさきても訓く下従(ヨリ)のことと也、かのこ
夜ハ従(ユ)の誤ならんてあるべし、下従ハ下待下に心まで下のおもし、之ハ助辞なるが、
首の下にありてのひく下より下よけいへる序とせり、宮ちにろ久ハ延の誤なるべし、

ふとしくてあらんあるべしといへるハ心ハきのびよ立つてあらバ逢てみのこしく

稀ちょんといふ

春野爾霞棚引咲花之如是成二手爾不逢君可毋

はるのゝにかすみたなびきさくはなのかくなるまでにあはぬきみかも

成ハ宗ヨなるをいふよく咲たる花の不成ハ不止といふ成ヨ同じ心つ三戒ち

花咲しころ逢しまゝにさかりのころになるまで逢はぬと歎くこ

吾瀬子爾吾戀良久者奥山之馬醉花之今盛有

わがせこにわがこふらくはおくやまのあしびのはなのいまさかりなり

あしび按ずるに三四の句ハさかりといはん為の序中の序之、盛ハ恋の盛をいふ

梅花四垂柳爾折雜花爾供養者君爾相可毛

うめのはなしだりやなぎにをりまじへはなにそなへばきみにあはんかも

折まじへて手向て逢させ賜へと仏に申さんとて之仕事なハとくに仏に

仏ゑといへりさきるなどん也りハ或人花ハ神の誤りとよめりされどもべし

姫部思咲野爾生白管自不知事以所言之吾背

をみなへしさきぬにおふるしらつゝじしらぬことをもていはれしわがせ

咲野ハ佐紀野、秋白ハ咲てつゞくこの梅の...白つゝじハしらぬといはんためのこと

まことゝみるべし咲野に生る花がつみといふ人

まいもれしとゆひてわがせても...

るゝいはれしと切てよむべしといへり

梅花吾者不令落青丹吉平城之人来管見之根

うめのはなわれはちらさじあをによしならなるひとのきつゝみるがね

人の上在の字を脱せしこの本ハ之ハ在の誤りのちなるべし、がねハ来をかねていふ

がを濁るべきを...

...つゝ...あれバ...

ならん人の許婚すむべきよしなく、始を捨てたゞ人てこそ人の其ありもらむ
までハ化しく人ハ逢ハせじといふことなるべし

如是有者何如殖蕪山振乃止時喪哭戀良苦念者
かくしあればいかにもなぞらゑけん、やまぶきのやむときもなくこふらくおもへば
山吹ハ集中妹に比るすじよみて、女を花にみれバ花と言ふ山吹とうゑてまて
それ山ぶきを妹にそへ、やまぶきの詞から、やむとハつゞけたり、ハなく止時なく
こふるを思ふことばに山ぶきをと仮りなり意くえんと悔るゝ

寄霜

春去者水草之上爾置霜之消乍毛我者戀度鴨
はるされバみくさのうへにおくしものけつゝもわれハこひわたるかも
みくさハ真草也、水篶（ミスズ）も書く篶なるを、水の字を借りたるのごとし、上ハ消と
いはん序のみ

寄霞

春霞山棚引欝妹乎相見後戀嘉
はるがすみやまにたなびきおぼつかなくいもをあひみてのちこひんかも
一二の句ハおぼつかなくといはん序也、ほのかに妹をみたりし後恋んと云

春霞立爾之日従至今日吾戀不止本之繁家波
はるがすみたちにし日よりけふまでにわがこひやまずもとのしげゝれバ

一云片念爾指天（カタモヒニシテ）
なかハ本のなかに、本の繁きことを恋のあまさにたとへたるにて、しげゝれバのれと
思ふる也、或本の作ちがひしてのをとよしとも

左丹頬経妹乎念登霞立春日毛晩爾戀度可母
さにづらふいもをおもふとかすみたつはるびもくれにこひわたるかも
さにづらふ枕詞、くれにハ宜なる、斉明紀の歌に于之盧母倶例尼（ウシロモクレニ）おきてかゆ

うんとまくれふ月じくんのたれぬらすんといつわ

靈寸春吾山之於爾立霞雖立雖座君之隨意

たまきはるわがやまのへにたつかすみたつともうともきみがまに〳〵

たまきはる枕詞、吾山ハ考十二廿くまいの如くん吾山手かゆ姐のよふそ広んよし

をさしてよみてし、吾佐の葉ちる山之と對釋考よいふか、宣長ハ吾ハ妻の誤

なりんよいつり此枕詞よかつゞくるを殊考べし、雖座とうとしとよめるハ崇

神紀急居此云莵岐于いよられべし、よいまといゝらん序ふく、立てゐるも君がまゝに

とりつゝ

見渡者春日之野邊爾立霞見卷之欲君之容儀香

みわたせばかすがののべにたつかすみみまくのほしききみがすがたか

此歌の意のあらはなれバよく見てさとるべし

急下毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何将晩

こひつゝもけふはくらしつかすみたつあすのはるびをいかにくらさん

此歌を意くゞるべし

寄雨

吾背子爾戀而為便莫春雨之零別不知出而来可聞

わがせこにこひてすべなみはるさめのふるわきしらずいでゝこしかも

歌ハ雨くふりて吾の方へ来ても、のこしの

背の中ふ出てふるくかれたりしにて背ハ妹の家の誤とかんよむなん、やゞさ

このみるべし、枕以のかとりみるべし

今更君者伊不往春雨之情乎人之不知有名國

いまさらにきみはいゆかじはるさめのこゝろをひとのしらざらなくに

此の女のよみてハ一首経るらむて、宣長ハ君ハ吾の誤ふ、さて是もたらくて旧

人の云るて、これハ又中まて思ひ合せてよめるなるべし、春雨の降ることにて云る

出てハまつれども、いよゝ又いみじくなるべきにしられねバ、これよりゆるべしと文
ゆゑよへ人のといへるハ、君がうへハ人聞のちぎり絶きぬべきねバのことし、しらざるなく
ふハしらざるまことといへらバ、ゆゑのにハ變證

春雨爾衣甚將通哉七日四零者七夜不來哉

はるさめにころもハいたくとほらめやなぬかしふらバなゝよこじとや

大意ハことなのうらみぐちにあめの降くしかれく降るをかハひし、するといひ古程
是七八数の云きを以証、卷十一あつみのと沖つ白浪立しきぬれども
といふこゝろなんなまあり

梅花令散春雨多零客爾也君之廬入西留良武

うめのちれしちらしてふるはるさめハふるたびねやきみがいほりせるらん
男の旅だゝしをまふしける女のよめる、おもひやりなるなり、君に
身ハ痛のこゝろより我ゆゑにいたくするなり

寄草

國栖等之春菜將採司馬乃野之數君麻思比日

くずらがわかなつまんとしめのゝのしばしばきみをおもふこのごろ

初句ハくずらの又くにすどもといふべし、吉野の奥なる國栖といふ里なる、神武紀
赤尾有る盤石を押て出る者のあり、天皇問給く、汝ハ何人ぞ。對へてまをさく
く臣ハ是磐排別の子、此則吉野國樔部が始祖也とあり。應神紀にも
國樔人來朝して歌へるよしみえ、司馬野ハ何州としれず。是ハ馬と
ばのうえなるべし、おもひ侍る志めの野といへバ、志めの野と詞べし、志ハく
しでなれバ、志ばの野しいたんなるやとりおもへど、兎と信、未し姿ハ見
あまた侍れバ、志めの野の志ばしもいふべし、又志ばしも集中志ましとよめる
とや、志ばの野ハくらゐの里なりや侍るえ

春草之繁吾戀大海方徃浪之千重積

はるくさの志げきわがこひおほうみのへによるなみのちへにつもりぬ

春草ハ志げきといはん為、さて後のわくこりつを思ふ、往ハ依の字の誤なるべし

浪よせてハ千重のこからるゝに

不明公乎相見而菅根乃長春日乎孤悲渡鴨

おほゝしくきみをあひみてすがのねのながきはるひをこひわたるかも

菅根の松短、悲く本恋に係る一本をはるく改つ

寄松

梅花咲而落去者吾妹乎将来香不来香跡吾待乃木曽

うめのはなさきてちりなばわぎもこをこむかこじかとわがまつのきぞ

梅ちるとかゞよみ絵したとき花ちりなば妹が来らんか、来るまじきか、おもふつの

まつてわが待んとまつを松にいひかけたり

寄雲

白檀弓今春山尓去雲之逝哉将別戀敷物乎

しらまゆみいまはるやまにゆくくものゆきやわかれんこひしきものを

白まゆみより今をいひかけてはるといへる始目也よりゆきやいそん序よりて別る

晴くもれる雲の字也

贈蘰

丈夫之伏居嘆而造有四垂柳之蘰為吾妹

ますらをのふしゐなげきてつくりたるしだりやなぎのかづらせわぎも

ますらをと八自らいふぞ、ふしゐなげきてハ柳のえだを送るいゝづきさにと

伏ゐいつゝ、又ハ伏とおきし、居ると書して夜昼妹を思ひなげくといへる、

せよとせしの言ハ古言也

悲別

朝戸出之君之儀乎曲不見而長春日乎戀八九良三

備上佐ヲ脱

あさよひのきみがまどのくさをよくみむでなのきはるびをこひやくらさん

曲ハ委曲の儀とおもくうちけ、歌にて[illegible]よく見ぬうしとくゆるなん

問答

春山之馬醉花之不惡公爾波思惠也所因友好

右の歌ども同答なれども、愛ましくハ此歌叶ひて次の歌となるの

あるやまのあしびのはなのふくからぬきみにはしゑやよせぬともよし

あしびハさきけんばあるれバなを、あしびハ歌ある声の声え、よせられむとも、よしハたとひ人の言伝せられさわぐとも、女のうた

石上振乃神杉神佐備而吾八更更戀爾相爾家留

いそのかみふるのかみすぎかんさびてわれやさらさらこひにあひにける

いそのかみ、そハ枕詞ふるハ、大和国山邊郡の石上の神宮也、古事記ニ天神高倉下ガ夢の中ニ剱を降し賜ふ時ニ建御雷神の曰、有平其国之横刀可降是刀 此刀名云佐士布都神、亦名云甕布都神、亦名布都魂、此刀者坐石上神宮也 紀ニハ韴靈とあり、石上の神ー

宮ニ此剱の坐ゆゑ、そこを布都とよびしを、後の世ニまた布留とよぶ、神名帳ニハ石上坐布留御魂とあり、神さびハ、こゝハ年月の久しきをいひて、かく老て又小恋をもしつる、巻十一石の上振の神杉神成恋をも我ハ更ニするかも、と似たる歌あり

右二首問答なり

右一首不有春歌而猶以和故載於茲次

狭野方波實爾雖不成花耳開而所見社戀之名草爾

さぬかたハみにならずともはなのみもさきてみえこそこひのなぐさに

此ハ狭額田乃野邊のあきはぎもよしあれバ、とて梅桃などありけん、巻十三ニさぬかたのとよめるハ近江の国なるの地名のごとく、宮ニ来りしハよる高き櫟の村落ふかくあるを、さぬかたハ女のうちの川の名ニて、なぐさめらるゝ事もなどいつるごとし、かハたとひ実ニならずとも、お思ふよしをとひたまへやといふなり

狭野方波實爾成西乎今更春雨零而花将咲八方

さぬかたはみになりにしをいまさらにはるさめふりて花さかめやも

さのかたはみになりにしとは、いまさらにはるさめふりて、さかりのころをすぎて、はなちりてみになりたるを、又はるさめふる

に花さくべしやいかで、ふたゝびきたるべしといふなり、ひとつにはみのなるまでといひてきたる心なり

梓弓引津野邉有莫告藻之花咲及二不會君毳

あづさゆみひきつのべなるなのりその花さくまでにあはぬきみかも

巻七旋頭歌に梓弓引津のべなるなのりその花つむまでにあはざらめやもなのりその

その花、いづれの頃ともしらねど、巻十五にも引津亭作歌とあり、筑前也、なのり

そその花のさけるとみえし時にあはでいたづらにすぐるを歎く心

川上之伊都藻之花之何時何時来座吾背子時自異目八方

かはのへのいつものはなのいつもいつもきませわがせこときじけめやも

零々ハ零々作同

巻四にも出たり、いつもの花詳なるべし

春雨之不止零零吾戀人之目尚矣不令相見

はるさめのやまずふりつゝわがこふるひとのめすらをあひみせざらん

零作ともいふを零々と云係りて、かく零零ともかきしなりと宣長云り、

雨にふりこめられて、こぬ人をまつのとくの事を見るやうによめるなり

吾妹子爾戀作居者春雨之彼毛知如不止零乍

わぎもこにこひつゝをればはるさめのそれもしるごとやまずふりつゝ

彼ハ春雨をさして、妹に逢ずして泣涙を、雨も知るごとくふりといふ也

相不念妹哉本名菅根之長春日乎念晩牟

あひおもはぬいもをやもとなすがのねのながきはるひをおもひくらさむ

此下二首ハ問答にて、まづ一首ハ此方よりいひかけたるのみにて、此

二首の歌ならべてみるべく也

春去者。先鳴鳥乃。鶯之。事先立之。君乎之将待

ちるされば、まづなくとりのうぐひすの、ことさきだちし、きみをしまたん

まちるの中に君はことにまさきとまほしけばことさきといへん處にせつ、

んハ云む神しまちをおもんとおもつて、君は言出しハたゞのことを云するなふ

山田のなりところの中よりまでて、神代紀如何婦人反先言乎

相不念。将有兒故。玉緒。長春日乎。念晩久

あひおもはず、あるらんこゆゑ、たまのをの、ながきはるひを、おもひくらさく

たまのをのごとし、こゆゑハ子なるんのゆゑ、むのをの枕詞、くらさくハくらす

ちくを延ミん

夏雑歌

詠鳥

丈夫丹。出立向。故郷之。神名備山爾。明来者。

ますらをに、いでたちむかふ、ふるさとの、かみなびやまに、あけくれば、

柘之左枝爾。暮去者。小松之若末爾。里人之。聞戀麻田。

つみのさえだに、ゆふされば、こまつがうれに、さとびとの、ききこふるまで、

山彦乃。答響萬田。霍公鳥。都麻戀為良思。左夜中

やまびこの、こたふるまで、ほととぎす、つまこひすらし、さよなかの

爾鳴

なく

本一に丈夫のさつ矢手挿立向、本廿ありしものゝわきに挟むひ立

むこの、これハ的に向ふ貝也吉あづまをのこハ出向ひ、うちかへんせむて、又云木

みるつかハうつかべまゝて大君の其の御楯と出立我ハおもてと四すて、

との丈夫丹といひて、丈夫どもら立向ふ勢をおもひてよめるなるん

と為ハにそれきさ、或人ハ丈夫丹ハ走出丹の誤なるんといへりハ、のきす

かゝる丈夫丹ハ誤写にて又ハ猶考べし、さて出も白ハ、おのが名を出して
白つるにて神をいでとされバ、けるん、すべてハみなもの名と、つみハ末の数まで
誤すむ、ゆゑ立つるハ、ほとゝぎすをとりく立まへるなるべし

反歌

客爾為而妻戀為良思霍公鳥神名備山爾左夜深而鳴

たびにしてつまごひすらしほとゝぎすかみなびやまにさよふけてなく

古今集にも、なれきさちるらにまづ旅ちる[illegible]ぎそよあわ、旅人のな

て立つる[illegible]

右古歌集中出

霍公鳥汝始音者於吾欲得五月之珠爾交而将貫

ほとゝぎすなのはつこゑハわれにもがさつきのたまにまじへてぬかん

[illegible]の初声をわがためにせんよ[illegible]交へぬかんとなん

草ハ葛ノ誤

朝霞棚引野邊足檜木乃山霍公鳥何時来将鳴

あさがすみたなびくのべにあしびきのやまほとゝぎすいつかきなかん

[illegible]時をまちわびてよめり

且霞八重山越而喚孤鳥吟八汝来屋戸母不有九二

あさがすみやへやまこえてよぶこどりなきやながくるやどもあらなくに

[illegible]ハ八重山[illegible]八重山越ゆるをあらたて、たれる
山をやこえきなくにしてまし[illegible]、孤ハ
[illegible]子とよぶ鳥の誤れるにや[illegible]ハ[illegible]誤てこよ[illegible]

霍公鳥鳴音聞哉宇能花乃開落岳爾田草引嬬嬬

ほとゝぎすなくこゑきくやうのはなのさきちるをかにくずひくをとめ

源康定の説草ハ葛の誤[illegible]田葛[illegible]
[illegible]

月夜吉鳴霍公鳥欲見吾草取有見人毛欲得
つくよゝみなくほとゝぎすみまくほりわがくさとれるみん人もがも
これハほとゝぎすをきかんとて庭草を取つゝまちゐれど、總
なりぐさハ室ちかき所ハ今の俗いまくさとれるといふハ、なりはひのために
木の枝などをきりて居たるに、ほとゝぎすの月よにあらハれて
今木の枝きりをとゝめてみん人もがなと、また十九ほとゝぎすきなきとよ
よめるハ思ひもよらず花橘をやどにうゑてほとゝぎすのきなきて
まつべき時とうゑしとおもふこの十九の本に来鳴とよめるハいかにぞ
ふりそん
藤浪之散巻惜霍公鳥今城岳叫鳴而越奈利
ふぢなみのちらまくをしみほとゝぎすいまきのをかをなきてこゆなり
今城ハ大和高市郡也、ほとゝぎすも来りなけるなり

且霧八重山越而霍公鳥宇能花邊柄鳴越来
あさぎりのやへやまこえてほとゝぎすうのはなべからなきてこえきぬ
朝霧のたちこめたる山の八重山のことくにはうちわたしての花辺から霧ハ雲の事の
の隠れなるべきうのはなの辺より鳴て来るなり
木高者曾木不殖霍公鳥来鳴令響而戀令益
こだかくはかつてきうゑじほとゝぎすきなきとよめてこひまさらしむ
こだかくならバほとゝぎすの来鳴てあはれまさらしめむ
難相君尓逢有夜霍公鳥他時従者今社鳴目
あひがたききみにあへるよほとゝぎすあだしときよりハいまこそなかめ
こよひあふ人ハいとまれなる人の夜なれバなくべきなり
木晩之暮闇有尓 一云有者 霍公鳥何處乎家登鳴渡良哉
このくれのゆふやみなるにほとゝぎすいづくをいへとなきわたるらん

このうれハ本の下やみをヨミ、哉ハ武の誤也、一本の有者もがなとあて同じ

こゝなるハ古本の例也

霍公鳥今朝之旦明爾鳴都流波君將聞可朝宿疑將寐

ほとゝぎすけさのあさけになきつるハきみきゝけんかあさいのぬらん

朝けハあかつき、君ハきゝけんか、そしくハ我にして寝のさめしかとも也

疑ハ寝やもん歟の誤かと見ゆなり

霍公鳥花橘之枝爾居而鳴響者花波散乍

ほとゝぎす花たちばなのえだにゐてなきとよもせバ花ハちりつゝ

慨哉四去霍公鳥今社者音之干蟹来喧響目

うれたきやしこほとゝぎすいまこそハこゑのかるゝにきなきとよまめ

神武紀慨哉此云于黎多棄加夜、一二の句ハ伊勢物語のことばを罵りていへり

志こハ志このしこ草ふぢ同じく、醜く、此ハ字乳多伎地志

許霍公鳥時之のかくして聞きるおもひしもおもひさくて此の句この下ハ其

あまりにきゝあきの後ハ猶ハべきるを来るをとりて、かるうれへ、許の分

ましばの下也

今夜乃於保束無荷霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左

このよらのおぼつかなきにほとゝぎすなくなるこゑのおとのはるけさ

おとのはるかなるを詞に、みえとひさしと云字同じ

五月山宇能花月夜霍公鳥雖聞不飽又鳴鴨

さつきやまうのはなづくよほとゝぎすきけどもあかずまたなかぬかも

さつき山ハ名にあらず、五月の比の山のかくらの名づく夜ハ卯の花のさかり

ちるハ月夜のやうに見ゆるをいへり、ちるなるハちるけるしと我が国にハ語る

る詞に名鳴てなくべきをと思ふさかるハ宮中得るなし

霍公鳥来居裳鳴香吾屋前乃花橘乃地二落六見牟

ほとゝぎすきゐてもなかぬかわがやどのはなたちばなのつちにおちんをみん

なかぬかハ鳴かぬもの歟、宜ちを、六凡年ハ左右手の語、のおつるまでと訓べし

よいつかさなりてハよき あつのとりよする けり

霍公鳥厭時無菖蒲蘰将為日従此鳴度禮

ほとゝぎすいとふときなしあやめぐさかづらにせんひこゆなきわたれ

いつとてもいとふ時ハなけれど、ほとゝぎすハ五月五日のせちにまゐることもあれ

とく、菖蒲のかづらハ續紀天平十九年五月太上天皇詔に、昔ハ五日節菖蒲をかづらとせしが、比来已に此事やむ、今より後菖蒲縵あらずして宮中に入ることなかれと有、第十八に田邊史福麿がい哥とも載れり

山跡庭啼而香将来霍公鳥汝鳴毎無人所念

やまとにはなきてかくらんほとゝぎすながなくごとになき人おもほゆ

人をしのびてほよあるなるべし、第八に旅人での妻大伴郎女みまかりし

時ふよ哭鳥の声ふほとゝぎすなきとよもす卯の花のともにやこしと

ハましものをとよめるも、ちなき人をまちしやといへるなり

ほとゝぎすてすさるいひつるハせしとなりけり

宇能花乃散巻惜霍公鳥野出山入来鳴令動

うのはなのちらまくをしみほとゝぎすのにでやまにいりきなきとよもす

ほとゝぎすこゑのもとしむさるものにちかきこと

橘之林乎殖霍公鳥常爾冬及住度金

たちばなのはやしをうゑんほとゝぎすつねにふゆまですみわたるがね

春のほとゝぎす夜をよめる也、わがやどの花橘を何されとも

ともよあかぬがねへ限をかりていひ

雨霽之雲副而霍公鳥指春日而従此鳴度

あめはれのくもにたぐひてほとゝぎすかすがをさしてこゆなきわたる

而後ろくハまた白山の方へ帰るまでまたひさく、にほとゝぎすの鳴たるとよめり、
霽を今本晴とあれど、字のまゝよみえざれば、一本なる霽を取

物念登不宿且開爾霍公鳥鳴而左度為便無左右二
ものおもふといねずあさけにほとゝぎすなきてさわたるすべなきまでに
ものおもひにいねざりし夜の明ぼのに、さわたるのさハ發語にて渡るなり

吾衣於君令服與登霍公鳥吾乎領袖爾来居管
わがころもきみにきせよとほとゝぎすわれをうながすそでにきゐつゝ
妻神へこれをそへきせてと八我をうながすとて袖をつけてくるとそこれハ今こゝろをきかせ
るなるべしとりつきや、きるものをきせよとまぬきさせよとまつるなるいひてをと
ほとゝぎすハ、翁八年八千の説ニハ領ハ衣一領なとのへにきたりて袖へのれば
このかけてきぬのことなるべし、此ハかけりしるきぬの袖にまつはりて鳴
よめるもあり、なおといふかきこともかくるハ四の句にてしるべし、猶考べし

本人霍公鳥乎八希将見今哉汝来戀乍居者
もとつひとほとゝぎすをやめづらしくいまやなれこしこひつゝをれば
わらしきもとしてありしくハ、いつか、集中もとのまゝきこえつへん、これをいまなるへき
遠つ人ハ、かつといへるなり、とやハよめるのそとしことも中よく待つくる詞へ

如是許雨之零爾霍公鳥宇之花山爾猶香将鳴
かくばかりあめのふらくにほとゝぎすうのはなやまになほかなくらん
ふらくハふるを延たる、うのはな山ハ卯の花のさけるを山にいへるなるべし
ふかくあめのふるをもいとはずほとゝぎすハ鳴やらんといふなり

詠蟬

黙然毛将有時母鳴奈武日晩乃物念時爾鳴管本名
もだもあらんときもなかなんひぐらしのものおもふときになきつゝもとな
和名抄云、爾雅云、茅蜩一名蠽吐久良之小青蟬也とあるハ、ひぐらしあるハたゞ

もありとよむ□じ

詠榛

思子之衣将摺爾保比與島之榛原秋不立友

おもふこがころもすらむにゝほひこそしまのはりはらあきたゝずとも

兄をうみおもへるにおもひこそハおもんへのしる詞、島ハ妻市郡の地

名榛ハ萩なり、此つるを鳥にめ□るハ、萩の花なく、此まの時ハ剝をいで

詠花

風散花橘叫袖受而為君御跡思鶴鴨

かぜにちるはなたちばなをそでにうけてきみがみあとゝおもひつるかも

其沖に橘のちるを袖にうくるハ、君の衣裳とするほどかなと

ごりつる、君御為跡とてつゝんをみやまわく君の上ハ君の字

ぬ入しなるべし

香細寸花橘乎玉貫将送妹者三禮而毛有香

かぐはしきはなたちばなをたまにぬきおくらんいもはみつれてもあるか

くはしハものゝほむる詞、孝紀三礼ニ見ゆ、三礼片らひとよんとよめ紀ニ羸とみ

それと訓、さるハ所送といふをもて、将送といへるハ病てつれ居る時の色三□

ことの葉歌とはかなるべし

霍公鳥来鳴響橘之花散庭乎将見人八孰

ほとゝぎすきなきとよもすたちばなのはなちるにはをみんひとやたれ

橘のはなちる庭を、我こそていまてゝ見るべきに、人なれとゝつく

吾屋前之花橘者落爾家里悔時爾相在君鴨

わがやどのはなたちばなはちりにけりくやしきときにあへるきみかも

橘も散るされば君を待わびしうらみもありて、くやしき時にあへるきみかもと

つるよしえ

見渡者向野邊乃石竹之落巻惜毛雨莫零行年

みわたせばむかひのゝべのなでしこのちらまくをしもあめなふりそね

うち、むかひの野辺と、行ハ所の誤く

雨間開而國見毛将為乎故郷之花橘者散家牟可聞

あまあけてくにみもせんをふるさとのはなたちばなはちりにけむかも

あまあけハ雨の晴る間也、国見んハ橘の花のさかりを見るなれど、国見せん時橘

もちらく、其美うらんみ、雨ふりつゞきて国見もせねど、ふるさとの橘ちりぬらん

と思ひてよめる也、ふるさとハ藤原の都の古京をいふなるべし

野邊見者瞿麥之花咲家里吾待秋者近就良思母

のべみればなでしこのはなさきにけりわがまつあきはちかづくらしも

吾妹子尓相市乃花波落不過今咲有如有與奴香聞

わぎもこにあふちのはなはちりすぎずいまさけるごとありこせぬかも

乞と与を誤れり、棟を妹にあふちにかけて、いつもちらずして、今咲るごとく

あれかしとねがふ也

春日野之藤者散去而何物鴨御狩人之折而将插頭

かすがのゝふぢはちりにてなにをかもみかりのひとのをりてかざゝん

おりてハをりての誤

不時玉乎曾連有宇能花乃五月乎待者可久有

ときならずたまをぞぬけるうのはなのさつきをまたばひさしかるべし

上句一二三ととりまして見べし、時ならずて卯の花の白くぬけるを玉つらぬくと

菖蒲をぬくべき五月なれ共、まだ四月なるうちの花をとおもへばあけば時ならぬ

とらへて橘の花根の蕾ならでは結束ぬるをときならぬといへり

問答

宇能花乃咲落岳從霍公鳥鳴而沙渡公者聞津八

沾ヲ今活ニ誤

うのはなのさきちるをかゆほとゝぎすなきてさわたるきみはきゝつや

聞津八跡君之問世流霍公鳥小竹野爾所沾而従此鳴綿類

さわたるのさは發語也

きゝつやときみがとはせるほとゝぎすしぬにぬれてこゆなきわたる

此哥よみ人を知ず、之努ヌ、しぬとよめり、五月雨にぬれて鳴わたるさ

るをいへり、沾を活に誤れり、文字を本に改む

譬喩歌

橘花落里爾通名者山霍公鳥将令響鳴

たちばなのちるさとにかよひなばやまほとゝぎすとよもさむかも

本ハ妹許通ふを、其ハ人にいひさわがれんといふとなり

夏相聞

寄鳥

春之在者酢軽成野之霍公鳥保等穂跡妹爾不相来爾家里

はるされば・すがるなすのゝほとゝぎすほとほといもにあはずきにけり

和名抄爾雅注云、蠮螉、佐曽里、似蜂而細腰者也、兼名苑云、一名蜾蠃、云々、

雄略紀に蜾蠃といへる人名あり、これをすがるとも訓り、似我蜂（ジガバチ）といふ

ものなれば、すがるの鳴くと言へるべし、ほとゝぎすは

も野の草を借てすがるの鳴くといふことなく

そふるなりとはいへるなるべし、さて集中にほとゝぎすとよめる

多くはほとゝぎすといふ序にて、殆と逢ずして、ほとゝきすの

たぐひしまなるは、ほととすといへり、されど二の句誤あるにて誤字

あらんか

五月山。花橘爾。霍公鳥。隠合時爾。逢有公鴨

さつきやまはなたちばなにほとゝぎすかくろふときにあへるきみかも

五月の橘にほとゝぎすのやどりゐる時節もみまくあるをよろこぶ

かくろふハかくるゝと延言

霍公鳥。来鳴五月之短夜毛。獨宿者明不得毛

ほとゝぎすきなくさつきのみじかよもひとりしぬればあかしかねつも

寄蟬

日倉足者。時常雖鳴。我戀。手弱女我者。不定哭

ひぐらしはときとなけども。わがこふるたをやめわれはさだまらずなく

上の我ハ唐本に於ノ字作る一本物と有。一本によるべし。そのこゝろと行べし

宮もハ家ハ君の傍へよりつかむ。ひぐらしよりなる。ひぐらしハ夜を時としてなけども

我ハ時とかぎらずなくとぞ。不定ハ常なくよみて、ときわかずとよまれし

このうたハたをやめなれバ、丈夫我ハ又世の人なればなどよめるなるべく、

女のみづからいへる也

寄草

人言者。夏野乃草之。繁友。妹與吾。携宿者

ひとごとはなつののくさのしげくとも。いもとわれとし。たづさはりねば

そのおくとりごとを思き、携りねばよろしとりごとをこのみ、又唐本吾の下に

師の字あり

涜者之。戀乃繁久。夏草乃。苅掃友。生布如

このごろのこひのしげくなつくさのかりはらへどもおひしくがごとし

巻十一ハわがせこがわがふるくハ夏草のかりそくれども生及ごとしハ大

あるに同じ。おひしくハ巻十一にあるがく。及ぶこと

真田葛延。夏野之繁。如是戀者。信吾命。常有目八方

頬合ヲ類令ニ誤

まくばたふちまつぬのまさげくかくこひばさねわがいのちつねならめやも

衣の手のゆくといふを思ひらへて衣のまさしハまことに我命の為なる

ならんや、絶しせぬてふ心に、又唐本方を雪に作る

五耳哉如是戀為良武垣津旗丹頬合妹者如何将有

われのみやかくこひすらんかきつばたにつらふいもハいかにあるらむ

類合をし、本類令に誤れり、又唐本にもあて改、巻十一垣幡丹頬経君

叫とあり、にづらふハ、にほへることよしなれハかきつばたハ枕詞

寄花

片搓爾絲叫曽吾搓吾背兒之花橘乎将貫跡母日手

かたよりにいとをぞわがよるわがせこがはなたちばなをぬかんとおもひて

かたよりハ片よるたとへ、橘の実を貫ハ花ちるを、是花ちるべけれハ

花をいつかぬかんと思ひてハるゝ朱さんしねがふなる

鶯之往来垣根乃宇能花之厭事有哉君之不来座

うぐひすのかよふかきねのうのはなのうきことあれやきみがきまさぬ

鶯ハうれしげに君ハ来まさぬをうしといはんあれバなり、君が来ぬこと、卯

花ハうのをいひ出ん為なる故なり、其ハうしと思ふよしをのべての

うの花のしく下全同じ意也

宇乃花之開登波無二有人爾戀也将渡獨念爾指天

うのはなのさくとハなしにあるひとにこひやわたらんかたおもひにて

上句ハつれなくてあるべきをたとふるべ、卯花のさかぬあてはまるにハ、あしきハ

さくとらまでくかたれる詞く、まれにあるのわざ也の種に八、似もぞてよみ

るなるべしへて知べし

吾社葉憎毛有目吾屋前之花橘乎見爾波不来鳥屋

われこそばにくくもあらめわがやどのはなたちばなをみにはこじとや

秋といふはあきなるに、梢をいへるにあらじ、とやいはん、女のうへ

霍公鳥来鳴動崗部有藤浪見者君者不来登夜

ほとゝぎすきなきとよもすをかべなるふぢなみみにはきみはこじとや

これはたゞ月をいへり、われをまつにまさる藤と、恋はしえて

まらじとやといふ也

隠耳戀者苦瞿麦之花尓開出与朝且将見

こもりのみこふればくるしなでしこのはなにさきでよあさなさなみむ

これらのこゝには思ひあまりし、花に咲むよは形出て見あらんといふなるべし

こはたゞ時ふることのとりてさくる之

外耳見筒戀牟紅乃末採花乃色不出友

よそのみにみつゝやこひんくれなゐのすゑつむはなのいろにいでずとも

筒をこゝに箇に誤れる、末つむ花は紅花之、末よりつみとれば末つむといふ也

色に出ぬさまてはあらはさとものゝふの恋しなにしとはかなひし、末は集中

これよりのちよめれば、定まりてあれつむ花とよまんとのこり

寄露

夏草乃露別衣不著尓我衣手乃干時毛名寸

なつくさのつゆわけごろもきせなくにわがころもでのひるときもなき

露をふさるる衣を、きせぬとすゝよのせは光せぬ、絶せぬなどのせなひし、たま

なか、先ではせてば盖（ケセル）流れざるなり

寄日

六月之地副割而照日尓毛吾袖将乾哉於君不相四手

みなづきのつちさへさけててるひにもわがそでひめやきみにあはずして

月の名のうへは考の別記にあり

秋雑歌

知ハ弥ノ誤火ハ哭ノ誤

七夕

天漢水左閑而照舟竟舟人妹等所見寸哉

あまのがはみづさへにてるふなわたりふねこぐひとにいもとみえきや

右第水の下底のこと、しのれバ二三四の句、うるそてさるまでてるふねのまそく

からびと訓べし。水底までも照らせるばかりよそほひたる舟をいひ、舟人

ハやがて牽牛のことにて、妹ハ織女をいへるなり。こよひしもやハわれまみえなんやと云ん

久方之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津乏諸手丹

ひさかたのあまのがはらにぬえどりのうらなげましつともしきまでに

第一卜歎居若ハ第十七字良奈氣之都追とありて、此ハ聲をかくしきまでハ、諸手ハ真手或ハ

かくることハたとひあらぬめづらしきまでありてとなり

左右とまると同じ意なり

吾戀嬬者知遠往船乃過而應来哉事毛告火

わがこふるつまはしれるをゆくふねのすぎてくべしやこともつげなく

知一本弥に作るぞよき。つまぞやよめて訓べし。火ハ哭の誤なるべし。いぬるを

まつとりて弥に嬬ハ待わびて、牽牛をさして、牽牛の舟こぎ出よと云とも

のまたなつまちてぞ遠くたゞよふとりハちがひけるし、さのるもちべきそのたし

りつるなり

朱羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

あからひくしきたへのこをしばみればひとづまゆゑにわれこひぬべし

あからひく牲色、しきたへのこをよみせるハ、あかねさし照るつの妹こそ

いふべしハ、あからひく色をかゝやく紅顔といへるにて、色妙とハたへなる

色なることなり。數細布のことく、數ハ物の数にうつくしきをいひ、細布しも

よき絹布とりつる語にて、女のうつくしく和やのちかる事を喩へたる語にて

と爲いはれき、婦を妻にあらしとぞこれにて、しばしばみれバこそ人妻なれ

ふたゝびハ巻一ハ紫のにほへる妹をにくゝあらば人嬬故にわれこひめやもとよ
めるに同じく人ハ人のまちこふるものをといへるなり。此歌七夕の歌ときこえず。誤て
こゝにのせたるなるべし

天漢。安渡丹船浮而。秋立待等。妹告与具

あまのがはやすのわたりにふねうけてあきたつまつといもにつげこそ

やすの渡ハ安河の一名也。神代紀ニ八十万神會合於天安河邊とあるを
いへり。實ハ秋ハ我の待也。わがたちまつといへるにてよまれ、与具ハ在其の誤
なるべし。告こそハ告よとのこゝろねがひ詞也。巻十三真福在与具とあるも
在其の誤なるを、まことるなれバ、此ニも誤れる也

従蒼天。往来吾等須良。汝故。天漢道。名積而叙来

おほぞらゆかよふわれすらながゆゑにあまのかはぢをなづみてぞこし

彦星ハみなかくよるか汝ハ織女をさす

八千戈神。自御世。乏孋。人知爾来。告思者

やちほこのかみのみよゝりともしづまひとしりにけりつぎてしおもへば

八千戈神ハ大己貴命をいふ。三輪の大神也。巻六ハ千桙の神の御世よりと云
舟のことく、ともしづまハ、たまたまにあひみるつまといふ事。告ハ借れる字にて、
告ハ継也。巻三吾語告言継将往（イヒツギユカン）ともかけり。つぎてし訓べし。これハつぎてしもつぎ
とよめり。孋ハ文選左太冲詩ニ伉儷不安宅。張銑ガ注ニ伉儷謂妻也とある
儷孋同歟。ふてたゞ通じ用ひしなるらんと僕ハいふ

吾等戀。丹穂面。今夕母可。天漢原。石枕巻

わがこふるにのほのおもわこよひもかあまのかはらにいしまくらまく

彦星をよめるにや。にのほのおもハ、巻十九御面謂之美於毛和と
自語也。おもわをいふ。いそハ別石也

已孋。乏子等者。竟津。荒礒巻而寐。君待難

志がつまのさかしきこゝろハたちてみつゐつゝてまちてねんきみまちがてに

一二の句ハ織女をさして竟津ゐるをひつよ訓されど心よしなし竟ハ立見二
字の一字になる例ありて天の河原に立ぬ日ハなかりしにてこそあるべしと思
いそれき宮もちて竟津ハはつるつのと訓べしさて一二の句ハおのがつまこそとし
むらきハとよみ四の句あがりまちてぬと訓べしとも又わ能考べし

天地等別之時従自孃然叙手而在金待吾者

あめつちとわかれしときゆおのがつましかてふあきにあきまつわれハ

四の句譯てあらん解がたし契沖ハ志のぞて一てまあるハ乞地ら孫はなり
織女ハおのがつまと宮くあるくかくぞくりまつことしいてあ猶考べし

彦星嘆須孃事谷毛告余叙来鶴見者苦彌

ひこぼしのなげかすつまにことだにもつげにぞきつるみればくるしみ

元暦本彦を孫に作るひこまごの歎きを見るもくるしくされバ他人の言傳を

告よまりしとく余ハ分の誤なり

久方天印等水無川隔而置之神世之恨

ひさかたのあまつしるしとみなしがはへだてゝおきしかみよしうらめし

此ま志るのも天験と定てしとあれわか或せがて訓されど元暦本
みなしがそとあふよべし別天漢のことや

黒玉宵霧隠遠鞆妹傳速告與

ぬばたまのよぎりかくりてとほくともいものつたへハはやくつげこせ

妹がつたへハ織女より言をつたへんにて其の詞を云なりとぞ与ハ
元の誤なり

海慍妹命者飽足爾袖振所見都及雲隠

なのこみるいものみことハあきたらずそでふるみえつくもがくるまで

あきたらずハあくまでのこゝろ

水ヲ志ノ假字ニ用タルハ拗音ヲ直音ニ轉タル也

夕星毛往来天道及何時鹿仰而将待月人壮

ゆふづゝもかよふあまぢをいつまでかあふぎてまたんつきひとをとこ

巻二夕づゝのかゆきかくゆきとあるへし、和名抄長庚由不豆々月人をとこハ

此下みえて彦星をいへり、此の下子を脱せりか、下ニ有

天漢已向立而戀等爾事谷将告嬬言及者

あまのがはこむかひたちてこふらくにことだにつげんつまといふまでは

こむかひのこハ此よりの略、巻十八にある、安の川許牟可比太知弖とある

等ハ来をおとづれくるを続くなる、これハ牽牛のいまだ織女をゆきむかへずして

恋するさまをよみたるなるべし、つまといふまでハまだ夫の妻といふ

までのあひだハ言だにかよはしてこそあらめの意、後に言にあふ奇の作る、程経たる字なりしん一の

水良玉五百都集乎解毛不見吾者干可太奴相日待爾

みづらたまいほつつどひをときもみずわれはほしかたぬあふひまつに

巻十八思良多麻能伊保都々度比乎てれむすびとよめり、古へ玉のそのまとを纏ひつけたれば、絶まもなくつけたるなるべし、玉を互につどひたれば、此の数多

きをいひ、緒によりぬるハ涸をかりてきこえかねたるハ不勝といふに同じ、又此歌よ

みよる涸もしいふまで干といへるもいはず、干ハ在の借字にて、あかずかたの

天漢水陰草金風靡見者時来之

あまのがはみづかげぐさのあきかぜになびくをみればときはきにけらし

巻十二、山河水陰生山草とあり、此隠を一本に陰とあるにより、陰ハ隠

の字にて、然れバみづかげの河べにて、根にハ水分とみえたるをみづかげとみづかげ

ともいひて、みなもとまでの生ひくる草をいふべし、それをみづかげ草といひて、それを

みいづるといふぞ云々とて松風になびくといひ、なほ巻十二山菅にあるハ、

名山もげに河べなれバ、あつまの山菅のまちかねてあなと菖いそれきされど、此

まで集に陰草とよめるハ山の陰草と云へきのれバ水に生る草など水陰草と云

いふこと葉汁がいつるふよるべし、来の下良の字を脱せるうんいふべし牡風
ふ天の川べの字れ、義くをあくく二星の年に一度あひ給ふらんといつてのこと
吾等待之白芽子開奴今谷毛尓寶比尓徃杰越方人邇
わがまちしあきはぎさきぬいまだにもにほひにゆかなをちかたびとに
字のこゝろ秋はぎさきぬ、はぎのべき時ふなれることなとぞいふて八月はなぬさく
ならひとぞいてせあて今もさかりなるは、此下の歌の人もたゞ今もを同じくといふ
ふりはやはゆられと云、第十三の艶の字をふりひと訓じたるは、段の詞
にていふべきなればあきふゆらんといふことなるらん、越方人は織女をさしてく
白は西方秋の色なれば、しらをとかきたり
吾世子尓裏戀居者天河夜船榜動梶音所聞
わがせこにうらこひをればあまのがはよふねこぎとよむかぢのときこゆ
うらせこは彦星をさせり、うらこひは心の中ふ恋ふる之

真氣長戀心自白風妹音所聴紐解徃名
まけながくこふるこゝろゆあきかぜにいもがおときこゆひもときゆかな
こまもくは長々の字をかくふるくべ、意は長々のこふるには、秋風の便にも妹がー
音信せしことゆるゆゑんぞ宝もは徃は待の誤りて、まちこゝゆえといふ
戀敷者氣長物乎今谷乏牟可哉可相夜谷
こひしくはけながきものをいまだにもともしむべしやあふべきよるだに
此歌ていふは、こふる日はけながきものを、ともしむべしやあふべき
そのをこそ哉らいづれのかなりん、意はくして年にひとくのよる
よみくはしくは詞之只、意はとるべし、とそしむべしやとは、まんとにあるし
とく衣あわくしいせんこゝかけつてさびらんやのこころ
天漢去歳渡伐遷閉者河瀬於蹈夜深去来
あまのがはこぞのわたりばうつろへばかはせをふむによぞふけにける

やうらむのむハ場のきこえ杙ハふねよふのふのさみ用ちうりまま渡り
渺の事わしバ何渺をふみ試るほどふ舟の更ぞるゝ

自古擧而之服不顧天河津爾年序經去来

いにしへゆあげてしはたもかへりみずあまのかハづまとしぞへにける

服とならねどこハたちぬふる衣なハあらで、機のさまし、彦星を称

こふるの切ちあるなよ、ちるまものをもいましへよかりのへまらんどもこ

天漢夜船搒而雖明將相等念夜袖易受將有

あまのがはよぶねをこぎてあけぬともあひんとおもふよそでかへずあらん

あひんとおもふ夜のわろきぞて、袖身をとらぐ万はかぬれバとよひてあはず

あひんといふて、二の句より結句へうそてみんべし

遙嬬等手枕易寐夜雞音莫動明者雖明

とほつまとたまくらかへてねたるよハとりがねなきあけばあくとも

手枕ハ、夜の袖のかへしと同じくかりて、嬬ハ嬬の誤なり

相見久猒雖不足稲目明去来理舟出爲牟孋

あひみらくあきたらねどもいなのめのあけゆきにけりふなでせんつま

いなのめの稲目、東雲の事なり

左尼始而何太毛不在者白栲帶可乞哉戀毛不過者

さねそめていくだもあらねバしろたへのおびこふべしやこひもつきねバ

さハ發語くいくだハいくバくの略くて、幾だくもとられざといふ也、あらねバ

つきねバすなあるまじきまのこと、おちらんとて、解かし帯を乞府

形見てつきぬるよ、帯乞べしやハ、織女の帰むるえ、え唐ふ過を過ぞろて、

きぞぎねバくあり

萬世携手居而相見鞆念可過戀爾有莫國

よろづよにたづさハりゐてあひみともおもひすぐべきこひならなくに

あひみむことハあるべきことなれ。爾今毛ハ念ノ作之、唐本によりてよむ

萬世可照月毛雲隠苦物叙将相登雖念

よろづよにてるべきつきもくもがくれくるしきものぞあはむとおもへど

百代まで照るべき月も一夜の雲に隠れて苦しき也。二年にて百代なりけん。ことハおもへど、一夜を待侘しむが苦しといふこころの

白雲五百遍隠雖遠夜不去将見妹當者

しらくものいほへがくれてとほけどもよひさらずみむいもがあたりは

天河をへだてて遠ければ、逢ふことハ稀なれども、妹があたりハ見んやらんとなく

為我登織女之其屋戸爾織白布織弖兼鴨

わがためとたなばたつめのそのやどにおるしろたへハおりてけむかも

そのやどハ織女の家のこと、義をまつりてよめるなり

君不相久時織服白栲衣垢附麻弖爾

きみあはずひさしきときゆおるはたのしろたへごろもあかづくまでに

織女よりあつらへおくりしその服をときて、ひさしくきてありけるゆゑ、あかづきけるよし

天漢梶音聞孫星與織女今夕相霜

あまのがはかぢのときこゆひこぼしとたなばたつめとこよひあふらしも

和名抄に爾雅云、子之子為孫、無万古、一名比古とあれば、孫ハひこなり

秋去者河霧天川河向居而戀夜多

あきさればかはぎりわたるあまのがはかはにむきゐてこふるよぞおほき

後撰集に川ぎりわたりてあり。此下まで川ぎり立波なるべしあれば、霧の下渡の字を脱せるか。又唐本に向居而を而向居とせり。かなたハむかひゐるといふ河

吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨

よしゑやしただならずともぬえどりのうらなけをるとつげんこもがも

真ちよいちぎらくて人傳をて妹ニ言傳せまほしきことくまさのしいやうみとも
といつることいふハ妹をさして

一年爾七夕耳相人之戀毛不過者夜深往久毛

ひとゝせになぬかのよのみあふひとのこひもつきねバよのふけゆくも

つきねだんハ傳のつきぬるのをいへ、不盡不過と過ぎ爲る

一云不盡者佐宵曽明爾来

天漢安川原定而神競者磨待無

あまのがはやすのかはらのさだまりてかんつどひハときまつなくに

此歌の天安河原に集ひ給ふハ時を限てまちと、一年のつどひハ一とせに只一度のみと定れるを限也之神競ハ河にうつしへとあれど、古人の詞にちなし、競ハ集同じ言ふ遊れバつどひと訓べし、磨ハ時の借字の借字ハ清濁にかゝハらぬ例くと前にもいへるごとし或人説ニ、而ハ西の字の誤、

競ハ鏡の誤にて、やちよのつかさかふしかみのかゞみハどくまつなくふと訓べし、これハ月を神代の鏡にたとへまして、此鏡ハ磨ことまつ事なくして、いつもくもらぬといへる七夕の夜ハ月をよめる例あれバいへり、非なるべし

此歌一首庚辰年作之　庚辰ハ天武天皇白鳳九年也

右柿本朝臣人麻呂歌集出　右三十八首ともに人麻呂歌集の言ざまなれバ皆同哥集なるべし

棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見

たなばたのいほはたたてゝおるぬののあきさりごろもたれかとりみむ

いほはたハ機の数多きをいふ、秋さり衣ハ秋されバ夕されバの、されの語のごとく、秋になれる衣なり、秋の衣をとりよそへたるなるべし、たれかとりみんハ彦星ならで誰の手にかとらんといへる、字音ハ秋去ハ和布の字の誤にて、ふぎたくごろもなりといへり

年有而今香将巻烏玉之夜霧隠遠妻手乎

としあつていまかまくらんぬばたまのよぎりがくれるとほつまのてを

としあつてとハ一とせたゝせてと

吾待之秋者来沼妹與吾何事在曽紐不解在牟

わがまちしあきハきたりぬいもとわとなにごとあれぞひもとかざらん

あれぞハあつてぞのこゝろ何事のありてか紐解てねざるらんといふこゝろ

年之戀今夜盡而明日従者如常哉吾戀居牟

としのこひこよひつくしてあすよりハつねのごとくやわがこひをらん

一とせ恋わたりし思ひを此一夜にはらしてといふ

不合者氣長物乎天漢隔又哉吾戀将居

あはずハけながきものをあまのがハへだてゝまたやわがこひをらん

あはずくハあはぬを延ていふ

戀家口氣長物乎可合有夕谷君之不来益有良武

こひしけくけながきものをあふべかるよひだにきみがきまさざるらん

七日の夜ハ織女の待ほどのこゝろ

牽牛與織女今夜相天漢門爾波立勿謹

ひこぼしとたなばたづめとこよひあふあまのかはとになみたつなゆめ

織女を後世おりひめとよめど、たなばたづめとよむべき事此歌にておもふに

てしるべし

秋風吹漂蕩白雲者織女之天津領巾毳

あきかぜのふきたゞよはすしらくもハたなばたづめのあまつひれかも

雲を領巾に見たてたるなり古への天女の領巾(ヒレ)纏(オガリ)といふ是なりと云ふ説

ていひつ

數裳相不見君矣天漢舟出速為夜不深間

志ばしくもあひみぬきみをあまのがはふなではやせよよのふけぬまに

志ばしくハ暫しくとも之

秋風之清夕天漢舟榜度月人壮子

あきかぜのさやけきゆふべあまのがはふねこぎわたるつきひとをとこ

月人をとこハつきよみ 牽牛をいふ

天漢霧立度牽牛之檝音所聞夜深往

あまのがはきりたちわたりひこぼしのかぢのおときこゆよのふけゆけば

君舟今榜来良之天漢霧立度此川瀬

きみがふねいまこぎくらしあまのがはきりたちわたるこのかはのせに

此川の瀬ハ天の川瀬をいふ

秋風爾河浪起暫八十舟津三舟停

あきかぜにかはなみたちぬしましくはやそのふなつにみふねとゞめよ

八十の舟津ハ津の多きをいへる也 舟の三ハ借字にてみ舟ハ御舟也

天漢川聲清之牽牛之秋榜船之浪𨅖香

あまのがはかはおときよしひこぼしのあきこぐふねのなみのさわぎか

𨅖ハ躁の俗字 字書ニ秋ハ速の借字ニて早く榜船をかいなのちるをもとぞ

いつも天の川を河とかける下皆是ニ同じ

天漢川門立吾戀之君来奈里紐解待

あまのがはかはとにたちてわがこひしきみきたるなりひもときまたん

一云 天川河向立（カハニムキタチ）

天漢川門座而年月戀来君今夜會可母

あまのがはかはとにをりてとしつきをこひこしきみにこよひあへるかも

をりてハ居てと也

明日従者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐

あまのがはわがたまくらとちかひしひきゐていねずてひとりかもねん

天原往射跡白檀挽而隱在月人壯子

あまのはらゆきてやいるとしらまゆみひきてかくせるつきひとをとこ

月人をとこハよるよみあるハ彦星のことときこゆると、そのゝ月の

ふしせんもいふべきされバ、三やの句ハ夕月の隠るをとぶらふなり、往射

跡三字解べからず、ば誤字なるべし

此夕零来雨者男星之早滂船之賀伊乃散鴨

このゆふべふりくるあめはひこぼしのはやこぐふねのかいのちるかも

こよひの夕べふるあめハ彦星のそこほどいそぎこぐ舟のかいのしづくのあまれ

るとなりけん

天漢八十瀬霧合男星之時待船今滂良之

あまのがはやそせきらひぬひこぼしのときまつふねはいまもこぐらし

時まつハ秋待なるべし

風吹而河浪起引船丹度裳来夜不降間爾

かぜふきてかはなみたちぬひきふねにわたりもきませよくだちのまに

風波立て、ひこぼしのあやふけれバ引き船して渡りきませと也、今も

有りきとそいふなるつらん、夜くだちぬまへハ夜更ぬほどをいふ

天河遠度者無友公之舟出者年爾社候

あまのがはとほきわたりはなけれどもきみがふなではとしにこそまて

天河打橋度妹之家道不止通時不待友

あまのがはうちはしわたせいもがいへぢやまずかよはんときまたずとも

うちはしハ板をもてかりそめに渡す橋也、年にてらハず打橋まて、

ありてかよはんといふ也

月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨

つきかさねわがおもふいもにあふよひはいましなゝよをつぎてせぬかも

そしのしハ助辞なり、今七夜續けかしと乞ふなり

年丹装吾舟榜天河風者吹友浪立勿忌

としによそふわがふねこがんあまのがはかぜはふくともなみたつなゆめ

とゝまる一とせびよそひして舟出さるゝ

天河浪者立友吾舟者率榜出夜之不深間爾

あまのがはなみはたつともわがふねはいざこぎいでんよのふけぬまに

直今夜相有兒等爾事問母未為而左夜曾明二来

たゞこよひあひたるこらにことゝひもいまだせずしてさよぞあけにける

人の妻どひなるをかくもよむべし

天河白浪高吾戀公之舟出者今為下

あまのがはしらなみたかしわがこふるきみがふなではいましすらしも

機蹋木持往而天河打橋度公之来為

はたものゝふみきもちゆきてあまのがはうちはしわたすきみがこんため

機和名抄云、國語注云、織設經緯以機成繒布也、揚氏漢語抄云、高機多加波太○文辨色立成云、機蹋万祢岐 蹋踏也、よくふみきとよむハ此機蹋の

天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨

あまのがはきりたちのぼるたなばたのくものころものかへるそでかも

古織義之八多手此暮衣縫而君待吾乎

いにしへゆおりてしはたをこのゆふべころもにぬひてきみまつわれを

義ハ義の借くよみなむ、これをのその旨まこゝろなし、詳首

足玉母手珠毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫将堪可聞

あしだまもたまもゆらにおるはたをきみがみけしにぬひあへんかも

乃ハ久ノ誤

神代紀手玉玲瓏（タマモユラニ）織経之少女者（ハタオルヲトメ）、是誰之子女耶（カムスメナルカ）、仁徳紀、四十年爰皇后

ゑ云ハ皇女所賞之足玉手玉、此集十一新室をふみしづの子がてだまならすも

ちなとよあり、ゆらハ鳴る音之、旗ハ借りて擬之

擇月日逢義之有者別乃惜有君者明日副裳欲得

つきひえらびあひてしあればわかれのをしかるきみはあすさへもがも

義ハ義の誤、別の下乃ハ久の誤るべし、あすさへもがもハ明日も見まほしき

せとねがふ也

天漢渡瀬深彌泛船而棹来君之檝之音所聞

あまのがはわたりせふかみふねうけてこぎくるきみがかぢのおときこゆ

棹ハ漕とよみてこぎし州べし

天原振放見者天漢霧立渡公者来良志

あまのはらふりさけみればあまのがはきりたちわたるきみはきぬらし

これハ妻の云をうつくし、彦星の来るを下つ国まで見やりてよめるなり

天漢瀬毎幣奉情者君乎幸来座跡

あまのがはせごとにぬさをたてまつるこゝろはきみをさきくませと

彦星のゐるかくまをあまたゝよ、鵲之の橋架する之

久方之天河津爾舟泛而君待夜等者不明毛有寐鹿

ひさかたのあまのかはづにふねうけてきみまつよらはあけずもあらぬか

あけずしてあらぬかのハ、あかるあれのしのを

天河足沾渡君之手毛未枕者夜之深去良久

あまのがはあぬらしわたるきみがてもいまだまかねばよのふけぬらく

彦星の歩渡せしをさへ、まかねばゝ、使のまのあぬそて、官本久を之ま

但ふ之まそハ今付ハそ

渡守船度世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不為

わたりもりふねわたせをとよぶこゑのいたらねばかもかぢのおとせぬ

和名抄云渡人云々日本紀云渡子（和太之毛利一云和太利毛利）とあり、巻十八にもかく和多

理母理とあれば、わたりもりともいふべし、わたせをはわたせよといふに

ひとし、巻七に氏河を穿今夜呼跡（フタワタセヨト）よぶこゑきこえざるらしかぢのおとせぬ

真氣長河向立有之袖今夜巻跡念之吉沙

まけながくかはにむきたちありしそでこよひまかむとおもへるがよさ

日久しく待てありし袖を、こよひまきなんと思ふがよさよと

天漢渡湍毎思乍来之雲知師逢有久念者

あまのがはわたりせごとにおもひつゝこしくもしるしあへらくおもへば

こしくものくは助辞、こしくもしるしとは、あひしことのしるしあること、あへらくは

あへるを延ていふ

人左倍也見不繼将有牽牛之嬬喚舟之近附往乎

ひこぼしやみつゞけてあらむひとぼしのつまよぶねのちかづきゆくを

えつゞけてあらんは、たえず見てあらんや、この意にて、上は彦星の織女を舟に

てむかへゆくさまによめり

一云見乍有良武（ミツヽアラム）

天漢瀬守早鴨烏珠之夜者闌爾乍不合牽牛

あまのがはせをはやみかもぬばたまのよはふけにつゝあはぬひこぼし

渡りかねて夜の更ゆるを

渡守舟早渡世一年爾二遍往来君爾有勿久爾

わたりもりふねはやわたせひとゝせにふたゝびかよふきみならなくに

玉葛不絶物可良佐宿者年之度爾直一夜耳

たまかづらたえぬものからさぬらくはとしのわたりにたゞひとよのみ

たまかづら枕詞、あふことは絶ねども、さ寝ることは年に一夜、ぬらくはぬるを延ていふ

戀日者氣長物乎今夜谷令乏應哉可相物乎
こふるひはけながきものをこよひだにともしむべしやあふべきものを
よにいふくちのかはりなく出たり

織女之今夜相奈婆如常明日乎阻而年者将長
たなばたのこよひあひなばつねのごとあすをへだててとしはながけん
あすをとほしハ明るの日をへだてゝいふ、それよりとしまのながらんといふ

天漢棚橋渡織女之伊渡左牟爾棚橋渡
あまのがはたなはしわたせたなばたのいわたらさんにたなはしわたせ
橋をわたせるが棚の如くなれバ棚橋と云、わたるのいハ發語、こハ織女のおわたりまれ
よみ人なし

天漢河門八十有何爾可君之三船乎吾待将居
あまのがはかはとやそありいづくにかきみがみふねをわがまちをらん
よそまでのは八十渡、舟人とよめり、三ハ御ふねの御之

秋風乃吹西日從天漢瀬爾出立待登告許曽
あきかぜのふきにし日よりあまのがはせにいでたちてまつとつげこそ

天漢去年之渡湍有二家里君将来道乃不知久
あまのがはこぞのわたりせあれにけりきみがきまさんみちのしらなく
有を荒に借てかけるハいづのし、絶のことよりあらく、たえてなかるらん

天漢湍瀬爾白浪雖高直渡来沼待者苦三
あまのがはせゞにしらなみたかけどもたゞわたりきぬまてばくるしみ
牽星の渡まで思ひとゞまり、結ハ織女の迹へまゐると結之

牽牛之嬬喚舟之引綱乃将絶跡君乎吾念勿國
ひこぼしのつまよぶふねのひきづなのたえんときみをわがおもはなくに
和名抄云唐韻云牽紋 天 巨焉 挽船縄也とみえたり、ふねをひきづなとて ふとえん

去ヲ出ニ誤
借ヲ惜ニ誤

むかしけるを、吾の下一本久の字あるハ之の誤也
渡守舟出為将去今夜耳相見而後者不相物可毛
わたしもりふねでしいでんこよひのみあひみてのちハあハじものかも
彦星の心よ作るなるを、去を本出に作、一本によりて改
吾隠有楫棹無而渡守舟将借八方須臾者有待
わがかくせるかぢさをなくてわたしもりふねかさめやもしばしハあれまて
織女の心を作む歌なるよ、楫棹をかくしたれバ渡るし舟かるべきや、言
しハらくまてよといへる也、借を本惜に作るハ誤なるを、歴本によりて改
乾坤之初時従天漢射向居而一年丹
あめつちのはじめのときゆあまのがハいむかひをりてひとゝせに
両遍不遭妻戀爾物念人天漢安乃川原乃
ふたたびあハぬつまごひにものおもふひとあまのがハやすのかハらの

出出ハ歳ノ誤具ハ曽ノ誤
荒ハ萩ノ誤具ハ曽ノ誤
鳥ハ焉ノ誤

有通出出乃渡丹具穂船乃艫丹裳紬丹裳船装
ありがよふとしのわたりにそほぶねのともにもへにもふなよそひ
真梶繁抜旗荒本葉裳具世丹秋風乃吹来
まかぢしゞぬきはぎがもとはもそよにあきかぜのふきくる
夕丹天川白浪凌落沸速湍渉
よひにあまのがハしらなみしのぎおちたぎつはやせわたりて
稚草乃妻手枕迹大船乃思憑而榜来等六
わかくさのつまをまかむとおほぶねのおもひたのみてこぎくらん
其夫乃子我荒珠乃年緒長思来之戀将
そのつまのこがあらたまのとしのをながくおもひこしこひつくさ
盡七月七日之夕者吾毛悲鳥
らんふみづきのなぬかのよひハわれもかなしも

いなびのいは発語、糸飾人は彦星をさして、出出は歳の字の誤にて、とし
のわたりとたまり、とて年之度とよめり、具穂船の具は夏の誤なるべし
誤れるか、宣長云、其の誤ならんといへり、巻三にも赤乃曽保船(アケノソホブネ)とよめり、
くはしくはしか説あれど、具を清音のかなに用ひし例なく、其誤へ
の誤に物を誤ることなかれば、荒は荻の誤ならん、神功紀に、幡(ハタ)
荻穂出吾也(スキホニイヅルワレ)と有、又或人は、荒は篶木(スキ)二字の一字に誤りたるといへり、
さもあるべし、本草業黄具世冊の具も、曽ら其の誤なるべし、秋風はそよ
とよふるをいふ、わつ子の大舟の秋河、妻このことに此妻は織女をいふ、
こまのとは彦星をいふ、立つもとらんとは、立のかざりをあそそらんと
いふ、これもかきしも立つ風ふく立像くつなし、ぬく鳥一本鳥子に作

反歌

狛錦紐解易之天人乃妻問夕叙吾裳将偲

こまにしきひもときかはしあめびとのつまどふよひぞわれもしぬばん
和名抄云、本朝式有暈繝錦、高麗錦、軟錦、両面錦等之名、言ニ
よりて、狛錦は此高麗錦也、巻三倭文なとの帯解替てとよめり、
あまびとは彦星なり、古訓ひこぼしとあれど、さてはよむべからず、此結句
も下つゆよくしのぶ

彦星之川瀬渡左小舟乃得行而将泊河津石所念

ひこぼしのかはせをわたるさをぶねのえゆきて(えゆきてはてん)はてんかはづしおもほゆ
さハ発語なるべく、小舟を得行而ともよめど、えゆきてとよまんは
よむべくもおぼえず、奥津の従にえゆきてとよまんとよまんの巻十一西志
ふかも得為(エスヤ)也と、などよめりといへるをみちかなる

天地跡別之時従久方乃天驗常豆大王

あめつちとわかれしときゆひさかたのあまつしるしとさだめてし

天河原爾。璞。月累而。妹爾相。時候
あまのがはらにあらたまのつきをかさねていもにあふときさもらふと
跡立待爾。吾衣手爾。秋風之。吹反者。立坐。
たちまつにわがころもでにあきかぜのふきかへらへばたちてゐて
多土伎乎不知。村肝。心不欲。解衣。思
たどきをしらにむらきものこころおほえずときぎぬのおもひ
亂而。何時跡。吾待今夜。此川。行長有得鴨
みだれていつしかとわがまつこよひこのかはの

上よ久方の天つ印と水無川をいへるにて、無ハ定の誤にて、大王とてしの
うたふ用ゐる例あまりあり、侯ハさもらふとよめるにて、このかぎとくくんおぼえ
[illegible]ずて、宮もハ欲ハ歡の誤にて、心不歡ハこころおぼえずと訓
べしとらつハ村きもの、ときぎぬの枕詞、行長有得鴨ゆきさるかくあかとかも
と訓ぐるハ行の字を誤れり、行ハ待の誤にて、まちつゝながくあらんかもの
誤なるべし、行ハ待といふべし、此川のとゆるぎかぶし、桜ニ行といふ
しを行も字を誤れるにや、まつらバゆくハらくを訓べし、されど得の上不の字を脱
せしにや、さらバあらんかもと訓べき也、猶考べし

反歌
妹爾相。時片待跡。久方乃。天之漢原爾。月叙經来
いもにあふときかたまつとひさかたのあまのがはらにつきぞへにける
片待ハ下待也、大の意なるを、その河原にあらんまの月をかさねてまちわ
たるなり

圖書文庫

国立公文書館
National Archives of Japan